

③『道教の世界』ヴァンサン・ゴーセール & カロリーヌ・ジス [著] 松本浩一 [監修] 遠藤ゆかり [訳] (創元社) フランス人著者による“外側から見た東洋”の参考に。序文には仙人が下界と超越した“山の人”で、俗人が見通し



『道教の世界』扉絵：後方にフクモ陶器編④で出てきた「荷物」(p80)が見える

のきかない“谷の人”とあり、山は地上で最も天に近い場所で、此方と彼方の境界のという道教的な意味だとわかる。山谷どんぶり (p40)、蓋蓋蓋蓋碗 (p63)

④『宗教とデザイン』松田行正 (左右社)

印 (p34-37)、メノラー (p128)、須弥山 (p141) など、東西の宗教的モチーフが網羅されている。世界を設計するための曲尺とコンパスを持った伏羲と女媧 (p31) は“デザイン道具を持った唯一の創造神”と書かれている。



⑤『天工開物』宋應星 [著] 藪内清 [訳註] (平凡社ライブラリー)

おおらかな挿絵とともに農業から工芸、建築、兵器などが解説される古の科学技術百科。陶器を作っているカバーは、フクモ陶器の制作風景を思い起こさせる。



⑥『増訂 易経』三浦國雄 (東洋書院)

むずかしすぎる本編たどりつく前に、総説に痺れてしまった。“他の書物なら、もともと事実があるから道理が述べ出される。ところが易となると、もともとあったこともないものを聖人があらかじめ述べておいて、人が占うのを待っているのだ”という「虚構された世界」は、ボルヘスが言っていた本と読者の関係や、用 (意味) を持たないフクモ陶器の“嘘”にも通じる。



・ブックデザインの裏コンセプト

⑦『追跡推理 空飛ぶ円盤』星野ひとし (立風書房)

*品切

科学技術が極まると宇宙へ達する。フクモ陶器の題材が UFO や宇宙に広がったのも当然の帰結である。同時代の子ども向け心靈写真の本なども真偽が定かではないものを取り扱うクラシックスタイルとロマンチズムを堪能できる。アブダクション算盤 (p75)



⑧ カラーブックス『骨董入門』小松正衛、『茶道入門』井口海仙 (保育社) *品切

竜宮城から戻った浦島太郎が元の世界に違和感を感じ



たように、現代の我々の目に半世紀以上前の印刷物は夢か別の世界のように見える。時間の流れは別世界へのトリップなのだ。古い印刷物を意識した本書のデザインは少しでも現実から遠ざかるよう試みである。

⑨『マッチラベル：明治大正』(紫紅社文庫)、「引札田村コレクション」(京都書院アーツコレクション)*品切 時代感と同じくらい意識されているのは“外側から見た東洋”である。フクモ陶器が再現したといわれる「横浜の珍品」は、西洋と東洋が交わる文明開化につくられたという。偽髷 (p87)



⑩『絵本中華食三昧』島尾伸三 (旺文社文庫) *品切

懐かしい風景としての中国語圏イメージを参照した本。写真はもちろん、色使いやレイアウトの細部まで行き渡る中華風味に痺れる。



⑪『日本料理 Delikat - international Gerichte der japanischen Küche』(VEB Fachbuchverlag Leipzig) *ドイツ語・品切

80年代のドイツ語の和食の本。タイトルは「日本料理」と言いたかったのだろう。陰鬱礼讃を吹き飛ばすバキバキの写真は“まちがいではないけど何かがおかしい”パラレルワールド感がある。ごはん付きカレー皿 (p6)



⑫『吉田初三郎鳥瞰図集』(昭文社)

文明開化後の日本を旅するための地図を描いたこの本では、日本語と英語が混在する美しい地図や、地図の裏面も再現されており、古い印刷物研究にも、脳内旅行のガイドブックとしても楽しめる豪華本。



・デザイン参考用

⑬“VISUAL EXPLANATIONS” Edward R. Tuffe (Graphics Press) *英語



本書で数箇所出てくる分類図の参考に。無用性分類図 (p19)は、この本のロックの歴史の図と「宗教とデザイン」の樹状パターンを展開を参考にした。



⑭『平成新装刊 怪獣図解入門』(小学館)

架空の立体物の図解。大胆なレイアウトも魅力的な本。

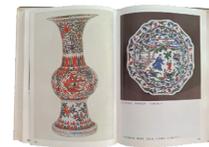


・勉強用

⑮『日本やきもの史入門』矢部良明 (とんぼの本) *品切 基本的なやきものの様式や歴史と種類の勉強用に。



⑯『清代 陶磁大全』『明代 陶磁大全』(藝術家出版社) *中国語 中国のやきものの勉強用。



『明代 陶磁大全』より：「マルチパース五彩」(p70)の原典も



・関連書：本書とあわせて読むとたのしい

⑰『杉浦茂マンガ館 (第4巻) 東洋の奇々怪々』(筑摩書房)

仙人がマンガを描いたらきつとこんな感じ。地上のしがらみを超越した世界。



⑱『三体』劉慈欣 (早川書房)

撮影の時フクモさんが三体Tシャツを着ていたのでチェック。極まった科学技術の行き着く先を見ると、一見突拍子も無いように思えたフクモ陶器「増殖系」(p60-71)への発展も、進化の自然な流れであることがわかる。ただし進化しているのは人類ではなく陶器なのだが。



⑲『豆腐百珍 (現代訳)』(大曜) *いろんなバージョンあり 書名を検討している時に上がった「無用百珍」の元ネタ。江戸時代にベストセラーになった豆腐レシピ集だが、凡例や目次にもユーモアがある。



⑳『地図集』董啓章 (河出書房新社) *品切 表題の「地図集」は、架空の香港案内である。香港を知らない読者がテキストだけで読み解くのはほぼ困難な上、それがさらに“すべてが、嘘八百、大ぼらである”のだ。読んでいるうちにめまがしてトリップしてしまう。



㉑『新釈 遠野物語』井上ひさし (新潮文庫)

序文 (p10) で語られる「聞き書き」は、古今東西に見られる物語のスタイルである。聞き書きスタイルの「遠野物語」をパロディにしたこの小説に「贋作の贋作」といわれるフクモ陶器とシンパシーを感じた。

